

ソーロウのジョン・ブラウン弁護について

尾形敏彦

一

抽象的な美德のために悲劇を招いたジョン・ブラウン (John Brown) を愛する人びとは多い。リンゼイ (Vachel Lindsay) は民謡のなかでこのアメリカ文学史上のひとつのエピソードの主人公ブラウンを賞賛し、ウォレン (Robert Penn Warren) は処女作品『ブラウン伝』(John Brown 1929) で主人公に深い同情を示した。^①

ソーロウ (Henry David Thoreau) は一八五七年と五九年にブラウンに会っている。すなわち、一八五七年にはブラウンが講演のためとキャンザス州における活動の資金募集のためにコンコードを訪れ、このとき、ソーロウはブラウンの親友でソーロウとも親交のある隣人サンボーン (Frank Benjamin Sanborn)^② の家でブラウンに会った。一八五九年にはふたたびブラウンが講演のためにコンコードを訪れ、ソーロウはエマスン (Ralph Waldo Emerson) の家でかれに会った。^③ このときはブラウンの冒険談に話がはずみ、ソーロウはかれに意気投合し、その考え方に深く共鳴した。それであるから、後日、ソーロウがブラウンを弁護したのは、友人として、奴隷制度廃止論者として、かれに同情したからだという説明はある程度まで納得できる。しかしながら、ソーロウがブラ

ウンに会ったのは前後二回にすぎないので、この二回の会談でどれほど深い感銘をうけたにしても、まったく個人的な動機からかれがブラウンを弁護したと考えることは危険である。そのみならず、ソローウは南部の事情については、経済面においても、文化面においても、ほとんど何も知らず、また、個人主義者であるかれは決して活動的な奴隷解放運動の戦士ではなかったということも考慮に入れなければならない。さらに、十月十六日夜に決行されたブラウンのハーパーズ・フェリー (Harpers Ferry, West Virginia) 襲撃事件についてソローウが事前には何も知らされていなかったということも無視できない。それにもかかわらず、この襲撃と敗北の知らせが伝えられるとすぐにかれがブラウン弁護に立ちあがったという事実は重要視されなければならない。そのときには、ほとんどすべての新聞や多くの有力な奴隷制度廃止論者でさえも、ブラウンの暴力行為を憎悪してかれに非難を集中したのである。

一八五九年十月三十日にソローウはブラウンについての三つのエッセイ^④のなかの最初のもので、もっとも重要な『ブラウン弁護』(A Plea for Captain John Brown) をコンコード公民館 (Concord Town Hall) でひどくブラウンに反感をもっている聴衆に向けて講演した。このなかでソローウは「わたしはこの事件が起きてから一週間以内に手に入れることのできるすべての新聞を読んできた。しかし、それらのなかにはこの人びとにたいする同情の声がただのひとつもなかったように思う。ただボストンのある新聞紙上で立派な意見をひとつ見たにすぎない。しかもそれは社説ではなかった」と語っているが、これは思い違いであって、ブラウンその人とハーパーズ・フェリー襲撃事件を弁護した人はソローウ以外にもあった。

ブラウンにたいする十九世紀の人びとの一般的な態度を見ると、たとえば、「ブラウンは伝説的な人物になっている。……人びとはブラウンの実体を見ることができなかった。すなわち、人びとはブラウンを悪魔的な犯罪人

として非難したか、あるいは、『神の怒れる僕』として尊敬したかである。」^⑧ というようなものである。象徴としての、または、神話的人物としてのブラウンは実際のブラウンよりもはるかに重要な人物であった。そして、こういう考え方は決して新しいものでも、驚くべきものでもない。十九世紀にはブラウンをモーゼ (Moses) ヨシユア (Joshua) ギデオン (Gideon) キリスト (Christ) カルヴィン (Calvin) クロムウェル (Cromwell) などとたえている人びとさえもいる。かれらはその時代の諸問題を解決するのに必要な精神的価値を人格化したものがブラウンだと考えたのである。かれらがそれほどまでにブラウンを熱烈に賞賛してアメリカの聖者に祭りあげている原因は、ブラウンにおける、あるいは、ブラウン弁護者達の想像のなかにおけるなにものであるかは検討を要する問題である。

ブラウンにたいしては、賛否両論が当時から現代に至るまで並存しているので、まず、必要と思われる最少限度の伝記的事実をあげようと思う。

ブラウンは一八〇〇年五月九日コネティカット州のトリントン (Torrington, Connecticut) に生まれた。かれの一家はかれが五歳のときにオハイオ州のハドスン (Hudson, Ohio) に移転した。かれは成人すると、農夫、鞣皮工、測量師、羊毛業者などという職業を転転とした。かれには実務の才能がなくて、たとえば、一八四二年にはオハイオ州のアクロン (Akron, Ohio) で破産宣告をうけたりしている。かれは青年時代から奴隷解放の秘密結社 (the Underground Railroad) に参加していた。そして、一八二五年にはペンシルヴェニア州のリッチモンド (Richmond, Pennsylvania) でかれ自身が秘密結社を主宰した。さらに、一八三四年頃までに奴隷の青年を教育する目的でペンシルヴェニア州における奴隷解放論者の組合を結成していた。この計画を拡大するために、一八三六年にはオハイオ州で活動し、一八四〇年にはオバーリン大学 (Oberlin College, Virginia) の所有地を測量し、

この土地に奴隷居住地の建設を計画したりした。一八四九年にはスミス (Gerrit Smith) によって作られた黒人奴隷の居住地ノース・エルバ (North Elba, New York) で農場を経営し、ここを拠点にして奴隷解放運動促進のために講演旅行をしてまわった。一八五四年のキャンザス・ネブラスカ法令 (Kansas-Nebraska Act) の通過はキャンザス州で奴隷制度についての激しい賛否両論をひきおこした。その結果、一八五五年十月にかれはオサウオタミー (Osawatomie, Kansas) で五人の息子達と共に急進運動を指導した。一八五六年五月二十一日にはキャンザス州のローレンス (Lawrence, Kansas) で略奪を行なったが、これは奴隷制度支持者によって五月二十四日に報復された。ついでブラウン許可のもとに四人の息子達を含む一団が奴隷制度支持者五人をポタウオタミー・クリーク (Potawatomie Creek) の附近 (Dutch Henry's Crossing) で殺害した。このいわゆるポタウオタミー虐殺事件はブラウンが意図したほどの効果をあげることができなかった。六月二日にはキャンザス州ボールドウィン (Baldwin, Kansas) 附近でかれはキャンザス州境戦 (the Kansas Border War) の第一回交戦 (Black Jack Battle) に三十人の部下を指揮して戦った。このときには、二十一人の奴隷制度支持者達とその指揮者 (Captain H. C. Pate) を捕虜にした。八月三十日にはかれは四十人の部下をひきいて、ミズーリ州からきた二五〇人の奴隷制度支持者達とオサウオタミーで交戦し、奴隷解放新聞のあいだでは『オサウオタミーの老ブラウン』 (Old Brown of Osawatomie) として有名になった。かれにたいする物資弾薬の援助はサンボーン、パーカー (Theodore Parker) ヲギンソン (Wentworth Higginson) スターンズ (George L. Stearns) などが会員になっている協議会 (the Massachusetts State Kansas Committee) によって行なわれていた。一八五六年と五七年の秋には、かれはキャンザス州での暴力事件のために裁判にかけられたが執行猶予になった。その期間に東部へ旅行をして、その奴隷解放論者達を訪ねている。一八五八年にはいると、かれはキャンザス州でモーガン (Shubel Morgan)

と変名して活動をはじめ、部下達はミズーリ州に入って十一人の奴隷を解放した。このときにかれはこれらの人びとと一緒にカナダへ逃れた。そして、五月八日にオンタリオのチャタム (Chatham, Ontario) で開催された大会で、ブラウンと、三十五人の黒人達を含む四十六人の部下達はヴァージニア州とメリーランド州とに自由州を建設するという最終目的で仮憲法をつくって政府を組織し、かれはその総司令官に指名された。一八五九年の中頃にブラウン達はハーパーズ・フェリーから約五マイルはなれたところにある一農場(ここはメリーランド州になる)を借用して司令部にした。そして、十月十六日の夜にベネ (Stephen Vincent Béné) の筆であげやかに画かれているように、ブラウンは十七人の白人達と五人の黒人達を指揮して、ポトマック河 (the Potomac) を渡河し、ハーパーズ・フェリーと合衆国兵器庫とを占領した。作戦をあやまって(と思われるのだが)かれらはこの町に一時泊した。翌日になると、州兵がチャールズタウン (Charles Town, West Virginia) から到着して退路を遮断し、その夜には海兵隊までも応援に加わった。そして、十月十八日の朝、かれが指揮官 (Colonel Robert E. Lee) に降伏を拒否したので戦闘が再開され、ブラウンとかれの息子達二人を含めて十一人が死傷した。軍隊側は死者五人、負傷者九人の損害をうけた。十月十九日にチャールズタウンで投獄されたブラウンは二十七日に裁判にかけられ、三十一日に反逆罪、陰謀罪、奴隷教唆罪、第一級殺人罪などが確定し、十二月二日にチャールズタウンで絞首刑になり、ノース・エルバに埋葬された。

以上のようにブラウンの一生は奴隷解放運動の戦士としての生涯であったと言える。このことは奴隷解放論者の賞賛を得るに十分なことであった。しかも、これだけではなく、さらに、かれをアメリカの英雄に祭りあげるにたるつぎのような事実がある。

一、かれの祖先の一人 (Peter Brown) はメイフラワー号でマサチューセッツ州の海岸に上陸したピューリタ

ンであった。

二、祖父 (Captain John Brown) はアメリカ独立戦争の勇士であった。

三、父 (Owen Brown) は奴隸解放論者であった。

四、かれの動機にはいささかの私慾も見られなかった。

五、奴隸解放という、すなわち、人間平等という崇高な大義名分をかれは抱いていた。

六、宗教上のことでは、かれは常に誠実であった。

七、キャンザス州において、かれは英雄的なゲリラ戦を敢行した。

八、ハーパーズ・フェリーにおいて、かれは勇敢でロマンチックな攻撃をして敗北した。

しかし、これらの諸事実をならべてみても、ブラウンが当時の北部急進奴隸解放論者達のあいだにひき起こしたあまりにも大きな興奮を説明することにはならないであろう。しかし、聖者としてのブラウンのイメージを熱心なブラウン弁護者の誇張だと早急に断定することも許されないことであろう。ブラウン弁護者達の講演には雄弁術ではなくて、ブラウンの狂人的なハーパーズ・フェリー襲撃事件にはまったくつりあわないほどの情熱がこめられていた。そういうわけで、ブラウン弁護者達の講演の意義を理解するためには、事実を超越して考えることが必要である。ソーロウは「ブラウンは育ててやる必要のない優秀な種子のようなものである」と比喩的に書いているが、ブラウンに、英雄とか、聖者とか、殉教者とかいうイメージを与えるのに役だったものはブラウン生来の性質だけではなくて、ニュー・イングランドという豊かな土壌とソーロウ、チーヴァー (George B. Cheever) ガリソン (William Lloyd Garrison) フィリップス (Wendell Phillips) パーカーなどによる熱心な耕作があったことを考慮に入れなければならない。

本稿の目的はブラウン弁護のためのソーロウの講演とかれの同時代のこれら代表的な奴隷解放論者達の意見を比較してソーロウの講演の意義を明らかにすることである。当時の有名な奴隷制度廃止論者としては前記の人びとのほかにジェイ (William Jay) タップン (Lewis Tappan) メイ (Samuel May) チャンニング (William E. Channing) ライト (Henry C. Wright) クウインズイ (Edmund Quincy) チャプマン (Maria W. Chapman) ヨント (Lucretia Mott) チャイルド (Lydia M. Child) ラウジョイ (Elijah P. Lovejoy) タグラス (Frederick Douglass) などがあげられる。本稿においては代表的な同時代の人びととして、コンコード思想界の中心人物とみられるエマソンとこの問題についても熱心であったと思われる前記の四人、すなわち、カルヴィン主義者である牧師チーヴァー、平和的改革主義者ガリスン、職業演説家で改革論者フィリップス、熱心な社会改革論者である牧師パーカーの四人をとりあげることにする。

(注)

- ① かれはこの伝記に熱中してハーパース・フェリーまで出かけて、ブラウンの襲撃事件目撃者を探して会ったりしている。
- ② ハーヴァード大学を卒業して一八五五年にコンコード市民になり、私立学校経営をはじめた奴隷制度廃止論者である。ソーロウとは数年間にわたって、ほとんど毎日のように夕食を共にした時期があったほど親しい隣人同志であった。
- ③ キャンビーによる二度目のときにはエマソンも同席してソーロウの家で会ったことになっている。(Henry S. Canby, ed., *The Works of Thoreau*, Cambridge Edition, Boston, 1937, p. 825)
- ④ 他の二つのブラウン弁護のエッセイというのは、一八五九年十二月二日、ブラウン絞首刑の当日にコンコードで行なわれた追悼式の席上でソーロウによって読まれたもので、ほとんど価値を認められない *After the Death of John Brown* と一八六〇年七月四日のノース・エルバにおけるブラウン追悼式用に使われたもので(これは当日代読され、後日、ガリスンの *Liberator*, July 27, 1860 に印刷された)前者と同様にその価値はあまり問われなく *The Last Days of John Brown*

⑥ *Thoreau*。

⑦ Thoreau: *A Plea for Captain John Brown in The Works of Thoreau*, p. 835

⑧ Charles A. Madison : *Critics and Crusaders*, New York, 1947, p. 39

⑨ ニク (1898—1943) の *John Brown's Body* (1938) はかれの最大傑作と言われるものでブラウン一味の戦闘員、北部の農夫、店員、南部の山の住人、農園貴族、黒人奴隷などの視点から南北戦争物語を歌ったものである。

⑩ Thoreau : *op. cit.*, p. 833.

二

当時のコンコード思想界の中心人物とみられるエマズンを一八五七年にブラウンに紹介したのはソーロウらしい。⑪ このときのエマズンの日記を見ると「キャンザスのブラウンは昨晩、市民会館で立派に講演をした」と書かれている。⑫ この講演は奴隷解放問題が市民を悩ました頃のことであったから、長いあごひげをもつキャンザスのパーティザン、老ブラウンの登場自体が極めて劇的なものであった。そして、一八五九年に再度コンコードをブラウンが訪問して、偷安の夢は破れると宣言したときにエマズンの感動は頂点に達したらしい。このことは一八五九年のエマズンの日記を通読すればよく分る。そのときの聴衆のなかのある人びとはブラウンの計画の委細を聞かないうちに進んで醸金に応じ、エマズンも直ちにコンコード文化団体 (the Concord Lyceum) に寄附した十五ドルをブラウンに寄附するように変更手続きをしている。⑬ そして、ブラウンの説く開拓線における奴隷所有者にたいする武力抗争論に賛成した。このようにブラウン事件に関しては、冷静で慎重なエマズンとしては異常なほどに興奮したということができる。そして、コンコード市民達から非難されたハーパーズ・フェリー襲撃事

件のあとでもエマソンはニュー・ヨークにいる兄弟に「非劇的なハーパーズ・フェリーの事件にもかかわらず、私達は元氣です。この事件はブラウンを二度も客として迎えた私達一同に深い関心をもたせました。……かれはまことの英雄です。……」と書き送っている。さらに、十一月十八日には、ボストンでブラウン弁護とかれの家族援助の必要性とを説いたが、そのときのエマソンの講演『勇氣』(Courage)では、ブラウンは聖人の域にいれられていた。エマソンによるとブラウンは「その殉教精神が、絞首台を十字架のように光榮あるものにすると思われる聖者」であった。このエマソンの講演はニュー・ヨーク・デーリー・トリビューン紙 (New York Daily Tribune) に掲載されて相当の反響を得た。そのほか、エマソンは数回の講演でブラウンの家族のために援助を求めたりしている。さらに一八六〇年の一月と二月にはバッファロー、デトロイト、シカゴ、ミルウォーキー、ウイスコンシンのマディソンなど遠く西部地方にまで講演旅行を試みた。それからニュー・ヨークでも講演をしたが、フィラデルフィアではエマソンはブラウン同調者として評判が高かったので、講演をすることを拒絶された。実際に、エマソンはその頃でも革命的思想家や詩人達とできるだけの連絡をたもっていた。このようにブラウン事件に関してエマソンは驚くほど急進的積極的であったということが出来る。このことはまた、レッドパス (James Redpath) がその著書『公人としてのブラウン伝』(The Public Life of Captain John Brown) を数名の急進論者達に捧げたが、そのなかにエマソンの名もあげられているのを見てもわかるであろう。また、エマソンはカーライル宛の私信のなかで、ブラウンをミケランジェロなどと同列の天才のなかに数えあげている。しかし、行動的なソーロウの目にはこのようなエマソンでも、まだ積極性を欠いているように映った。たとえば、一八五〇年に逃亡奴隸法 (the Fugitive Slave Law) が議会を通過したときに、エマソンは「この法律の施行には是非とも反対しなければならぬ」と日記に書いたりしているが、実際にはなにもしなかった。この点をとりあげて、エ

マスンはただ礼儀正しいだけで偽りのない野性味に欠けているとソローは嘆いたが、思想活動を唯一の行動とするエマソンにそれ以上の実際の行動を期待することは無理である。ここで「奴隷開放問題」という言葉のかわりに「ブラウン事件」という言葉を使用したのはエマソンが奴隷開放問題に不熱心であったからというのではなくて、ブラウンその人に興味をもち、その意見と行動とに感激してかれを英雄に祭りあげたとみるのがより適当だと考えたからである。

つぎに主としてレッドパス編纂の『ハーパーズ・フェリーの反響』^⑧によってチーヴァーなど四人の意見をみると、かれらはブラウンという人間に興味をもっていただけではなくて、ブラウンが抱いていた思想にだけ関心をもっていたことがわかる。大ざっぱに言って、十九世紀の賞賛の特色は誇張であるが、たとえそれを考慮に入れても、チーヴァー、ガリソン、フィリップス、パーカーなどはエマソンより以上に、不当なまでにブラウンを賞賛し、さながら神話的英雄でも描写するようにブラウンを画いている。

一、チーヴァーの説教(*The Martyr's Death and the Martyr's Triumph*)

これはその時代の殉教者としてのブラウンを示そうとしたものである。チーヴァーはアメリカ史上の重要文書であるメイフラワー契約 (*The Mayflower Compact*) を引用して議論を展開した。かれにとって好都合なことは、ブラウンの祖先の一人がこの契約立案に関係していたことであった。チーヴァーはこの契約を「正義と平等の法則にたいして服従すること。至高のものとしての神と神託にたいして服従すること。法律で禁止されているものを神が求めるときには人間の権威にたいして反抗すること」を約束したものだとして解釈している。^⑨さらにかれは言葉をつづけて「これはキリスト教徒のなかの英雄であり、非凡な人物であるブラウンが生命を賭して悩んだ問題である。この問題とは人間にたいしてというよりも神にたいする罪なのであるが——奴隷制度という罪悪のこ

とである。この罪悪を取り除こうとしてブラウンは——神に服従して——奴隷のために、奴隷をつくる政府と法律とにたいして生命をすてて反抗したのである」と述べた。この説教のなかでチーヴァーは、神を尊敬するブラウンの態度をくりかえし指摘して、そこに聴衆の注目を促している。チーヴァーによると、ブラウンは敬虔な祈りの人、神によって地上に送られた人、敗北と屈辱のなかで刑死を待つ間も「毎日、神とともに座していた」人であつたということである。そして、チーヴァーがブラウンと対照的に非難攻撃しているものは神の掟を否定して、奴隷制度という恐るべき罪悪の存在を許している国家である。かれの言葉によると「国家は罪悪を許容しているということとどまらず、これを正義であるとして王座につけ、法律をもってこれを是認し、その法律の侵犯を刑罰に問うてさえている」のである。さらに、かれは神のわざと奴隷制度廃止運動とを同一視して「このような犠牲者ブラウンを絞首刑にする罪はユダヤ人のキリスト殺害という恐るべき罪に似ている」と結論した。チーヴァーにとってブラウンはキリスト自身や殉教者達と同程度に神聖な人物であつた。さらにすすんで、チーヴァーは、勝利は殉教者をつくらないと主張して、敗北をブラウンの功績に帰するようなことさえほめかしている。このようにして、チーヴァーにとってはブラウンの刑死は神が奴隷制度に反対であるということを示すための理想的な機会を提供してくれたことになっている。そして、ブラウンは「その人格が神の手になるもので、人間のつくつたものではない」一種の複讐天使にまでもチーヴァーによって高められている。

二、ガリスンの講演

有名な非暴力主義者ガリスンは「もし、われわれが危機と受難のときに際して、平和主義と寛容主義とを捨てようというのであるならば、これらの主義はいかなる価値と効果とをもつであろうか」と述べて平和主義を擁護した。若い頃から禁酒主義を唱えていたこの元新聞記者はまれにみる道徳的な人物であつた。一八三三年のアメ

リカ反奴隷協会 (American Anti Slavery Society) と一八三八年のニュー・イングランド無抵抗協会 (New England Non-Resistance Society) の暴力反対宣言はいつれもガリスンの起草であった。しかし、一八四六年から四八年までのメキシコ戦争とそれにつづく一八五〇年の逃亡奴隷法の施行は熱烈な非暴力主義者ガリスンにさえも非暴力が効果的かどうかという疑惑を抱かせたようである。この平和主義者ガリスンがブラウンの弁護に立ちあがったのは、かれと同じように平和主義者であって、事情如何を問わずに暴力を認めることのできなかつた完全な無抵抗主義者ホイットィアー (John Greenleaf Whittier) がブラウンの暴力をその人道的目的から切り離して批判したときのような詩を発表したときであった。ついであるがらホイットィアーはブラウンを賞賛したこともあつたが、批判したことの方が多かつた。

Perish with him the folly

That seeks through evil, good ;

Long live the generous purpose

Unstained with human blood !

Not the raid of midnight terror,

But the thought which underlies ;

Not the outlaw's pride of daring,

But the Christian sacrifice.

(悪によつて善を求める愚かな行為は

かれブラウンとともになくなれ

血で汚されない高潔な決意に

真夜中の恐怖の襲撃にではなく

その底に流れる思想に

無頼の徒の不敵な自負心ではなく

キリスト教徒の犠牲的行為に

栄えあれ^⑤

ガリソンはブラウンがヨシユアとかギデオンのようなキリスト教の戦士達、あるいは、アメリカ独立戦争の英雄達に似ていることを強調して「すくなくとも同等の名誉」を要求し、「道徳的に偉大な人格者という点で、また、まったく無私慾な行動の人という点で、ブラウンはかれらよりもすぐれている」と主張した。ガリソンのブラウン弁護をみると、ブラウン非難は奴隷制度廃止運動非難にほかならないという考え方にもとづいていた。奴隷解放という大義名分を守るためにはブラウンを弁護することが必要だとガリソンは考えたのである。「一方において、ブラウンにたいする同情と賞賛のために無抵抗主義が否定されはしないかという懸念があるとすれば、他方において、臆病風に吹かれて自分の確信を公言できない人びとや奴隷制度を強く支持しているために奴隷にたいする憐れみを全然感じない人びとがブラウンを無頼漢、裏切者、殺人者だと非難する声にはブラウンの大義名分にたいする不当なそしりがありはしないかという懸念がある」とガリソンは力説した。

三、フィリップスの演説

ガリスンの後継者と考えられるフィリップスの演説も、チーヴァーの説教同様に、ニュー・イングランド・ピュリタンの歴史への回想ではじまっている。しかし、かれはメイフラワー契約よりも、さらにさかのぼってカルヴィン (John Calvin) その人にまで言及している。そして、つぎのようなニュー・イングランドの歴史における二つの本質的な考え方に聴衆の注目を促している。

一、個人の判断は神聖である。

二、行動を起こす力は正しい。

フィリップスは「ピュリタニズムは行動である。それは観念を人格化することである。然るべきときには制度と呼ばれるものでも疑ってみることであり、また、それを捨て去ることもある」と述べ、「ピュリタンとは古い観念によって縛られることのない人、すなわち、現在の神託に耳を傾ける人である」と語った。正しいことをなすべきだと直感するときには他人の意見について思い悩まないのがピュリタンである。フィリップスは「神を自分の魂のなかに認めて行動したブラウンこそ『現在の神託』をうけて行動したピュリタニズムの化身であって、『一般大衆が何を考えているか』ということには無頓着であった」と述べている。さらに、イギリスのピュリタンが十七世紀の専制政治の弊害を暴露したのと同じように、行動によってブラウンは奴隷制度のヴェールを切り裂き、その恐るべき罪悪の実体を暴露したのだと考えるフィリップスは「政治家が七十年もかかって教えることができるより以上のことを一つの行動が一週間で千八百万国民に教えたのだ」と強調した。さらに、フィリップスはブラウンをただ敬虔なピュリタンというよりもはるかに高く評価している。その理由は、ピュリタンとは自分自身の、または、一族の正義のために生命を捧げる人であるのに、「ブラウンは、自分があずかり知らない血をもつ異民族のために生命を捨てたのだから、かれらよりもすぐれている」というのである。そして急

進的奴隸制度廢止論者フィリップスは、聴衆を行動へと煽動するためにこの演舌のなかでブラウン自身の言葉を効果的に使用した。すなわち、「わたしが教えた金言を実行せよ、わたしが示した原則にのつとれ。危機が烈しく迫ってきたならば、それに正面から立ち向え。戦闘が近づいたならば、さらに忠実にわたしのことを思いだせ。わたしが約束したこと、すなわち、奴隸は当然抵抗すべきだということをわたしは実際に示したのだから、わたしの行動は失敗だったと世間の人びとが言ってもよい。北部の人びとがこの計画の背後に立ちあがる用意があることを示せば、わたしの計画が失敗ではなかったことが立証されるであろう。諸君がわたしの墓の上に立つに値することを示すために、わたしは喜んで神のために殉教精神に燃えて、裁判所に口をあけている奈落に飛びこむつもりだ」と。フィリップスは奴隸制度廢止という問題に直面した行動人のイメージをブラウンのなかに認めた。それで、「法律」とか「秩序」とかに反対する人びとを結集する手段としてブラウンを利用したのである。フィリップスにとっては、ブラウンは理想の国における神の秩序と掟との化身であって、モーゼ、キリスト、ルーテル(Luther)などと同等の価値をもつ人間であった。それにもかかわらず、急進改革主義者フィリップスの演説は、当然のことかも知れないが、牧師チーヴァーの説教ほどには神中心ではないという印象を与える。

四、パーカーの弁護

進歩的牧師パーカーは、以上の三人に比較すると、早くから止むをえない場合の暴力行使を容認していたという点で、かれらよりもはるかに実地的であった。かれはブラウンがハーパーズ・フェリーで成功するだろうと考えたからではなくて、「不可避の衝突を促進するらしい」と感じたからブラウン弁護に立ちあがったのである。パーカーは奴隸制度と民主主義とが両立しないことを指摘し、この事実を直視することの必要性を述べて、「奴隸制度を守るつもりならば民主主義を捨てなければならず、民主主義を守るつもりならば奴隸制度を捨てなければ

ばならない」と説いた。また、パーカーは知識人ならば当然考えている筈だと前置きして一連の規則を作りあげた。そのなかにはつぎのような項目が含まれている。

- 一、奴隷はその所有者を殺す権利をもつ。
- 二、自由人は自由を求める奴隷を助ける義務をもつ。
- 三、同時にその権利をもつなど。

パーカーにとっては、奴隷問題解決策としての暴力行使は必然的のことであり、「わたしは、すくなくとも他の手段が目的を達成することができないならば暴力を歓迎する。北部の多数の考え深い善良な人びともわたしに同意するであろう。さもなければ、われわれは独立戦争の英雄をなぜ尊敬し、その栄誉を賞賛するのであるうか」と主張した。このようなパーカーの態度から考えてみると、ハーパーズ・フェリーの襲撃は、暴力が奴隷制度をとりのぞくための唯一の手段であることを示したアメリカ最初の大事件であったために、かれはブラウンを賞賛し、弁護したと行うことができるかも知れない。とにかく、奴隷制度と民主主義とが両立しないことを力説したパーカーはこの問題の核心をついたと言うべきである。多少の誇張はあるにしても、フロースィンガム (Octavius B. Frothingham) の「恐らく誰でも、ガリソンでも、フィリプスでも、かれパーカーほどに北部の人びとの良心を覚醒し、啓発することはできなかった」という言葉は正しいであろう。

程度の差こそあれ、以上の人びとに共通している意見は、ブラウンはキリスト教の聖者達と同様に永生不死であり、ブラウンの敗北はブラウンの勝利であるというロマンチックな考え方である。

(注)

- ① Rusk, Ralph L. : *The Life of Ralph Waldo Emerson*, Columbia University Press, 1949, p. 397.
- ② Emerson, Ralph Waldo : *Journal*, February, 1857.
- ③ Rusk : *op. cit.*, p. 397.
- ④ *Ibid.*, p. 401.
- ⑤ *Ibid.*, p. 402.
- ⑥ “To Wendell Phillips, Ralph Waldo Emerson, and Henry D. Thoreau, Defenders of the Faithful, who, when the mob shouted, ‘Madman!’ said, ‘Saint!’”
- ⑦ Michel Angelo, or Machiavelli, or Rabelais, or Voltaire, or John Brown of Osawatomie, (a great man,) or Carlyle, ... (Concord, October 15, 1870)
- ⑧ Emerson : *Journal*, May, 1851
- ⑨ Redpath, James : *Echoes of Harpers Ferry*, Boston. 1860.
- ⑩ *Ibid.*, p. 214.
- ⑪ *Ibid.*
- ⑫ *Ibid.*, p. 222.
- ⑬ *Ibid.*, p. 217.
- ⑭ *Ibid.*, p. 235.
- ⑮ Cf., *Ibid.*, p. 226.
- ⑯ *Ibid.*, p. 234.
- ⑰ Garrison, William Lloyd: “Account of Being Mobbed and Jailed” in W. P. and F. J. Garrison: *William Lloyd Garrison vol. II*, Boston, 1894, p. 18.
- ⑱ 印刷屋の小僧をしていたガリスンは一八二六年に地方新聞 Free Press を創刊したが、これは数ヶ月で廃刊になった。その

の翌年、ボストンで National Philanthropist 紙を編輯し、おもに禁酒を唱えた。一八二八年に有名な奴隸制度廃止論者ランディ (Benjamin Lundy) にめぐりまわつ、その影響でボルティモアに赴いて、ランディの解放新聞 (Genius of Universal Emancipation) を編輯したが、そのあまりにも激烈な論調が災いして七週間投獄されたことがある。そのとき (一八三〇年六月五日) には保釈金を同志タッパン (Arthur Tappan) に払ってもらつて出獄した。それから、ボストンで解放新聞 *The Liberator* を発行 (これは一八三五年一月一日に第一号が出たが、論調が激しすぎるために読者は三、〇〇〇人以上にはならなかった) して奴隸所有は犯罪だと断言した。ガリスンの名は次第に有名になり、一八三五年頃には身辺の危険さえもあつた。しかし、かれは終始、道徳的態度を守つたのでソーロウその他の知識人達は好意をよせていた。かれの論調は激しかったが、同時に非暴力を力説したので、ガリスンを十九世紀前半における最大の平和主義者の一人だと言つてもよいであらう。そのために、かれが非暴力の態度を捨てざるを得なくなつた事情を考えると、たしかに、「ガリスンの非暴力の崩壊は、アメリカ史における非暴力運動のもっとも悲劇的な失敗であつた」 (粹川羔『アメリカにおける非暴力の系譜』青山学院論集第八号) と言つことができるであらう。

① Redpath : *op. cit.*, p. 304.

② *Ibid.*, p. 305.

③ *Ibid.*, p. 309.

④ フィリップスは一八三一年にハーヴァード大学を卒業して法律学研究に入つたが、一、二年たつと奴隸制度廃止論者になつて、ガリスンにしたがつた。一八三七年十二月八日にボストンの Faneuil Hall で行なわれた奴隸制度廃止論者ラヴジョイ殺害 (Alton, Illinois) に抗議する集会で、かれは烈火のような演説をして、一躍、有名になつた。そのときから南北戦争の頃まで、かれはガリスンの片腕として奴隸解放運動に活躍した。しかし、一八六四年にリンカーン大統領の再選問題でガリスンと意見が衝突し、その翌年には American Anti-Slavery Society は解散すべしだといふガリスンの主張に反対して、ガリスンのあとをついで会長に選出され、それ以後、五年間にわたつてこの協会を活動させた。かれは雄弁家として知られ、Daniel Webster や Edward Everett とならべられてもよい人である。

- ②⑧ この講演を「ウェンデル・フィリップスの編書のなかで *Wendell Phillips on the Puritan Principle* と題してゐる。
- ②⑨ Redpath: *op. cit.*, p. 108.
- ②⑩ *Ibid.*, p. 110.
- ②⑪ *Ibid.*
- ②⑫ Cf., *Ibid.*, p. 112.
- ②⑬ *Ibid.*, p. 113.
- ②⑭ *Ibid.*, p. 117.
- ②⑮ *Ibid.*, p. 118.
- ②⑯ Cf., *Ibid.*
- ②⑰ 一八四六年にボストンで牧師になったパーカーは聖書の權威、キリストの超自然的な人格、聖なる使命を否定した。それ以前に出版されたかれの講演集 (*A Discourse of Matters Pertaining to Religion*, 1842) はとくにイギリスとドイツでひろく読まれ、やがて「奴隸制度改革論者」人道主義者としてかれは有名になった。
- ②⑱ Cf., *Dictionary of American Biography*, 1936.
- ②⑲ Redpath: *op. cit.*, p. 74.
- ②⑳ *Ibid.*, pp. 74-75.
- ㉑ *Ibid.*, p. 86.
- ㉒ Cf. Frothingham, Octavius J. (ed.): *Theodore Parker, A Biography*, Boston, 1874.

三

ソーロウの『ブラウン弁護』はブラウンに反感をもっていた聴衆の間にも驚くほどの共感をひき起こしたと云

ソーロウのジョン・ブラウン弁護について

マスンは語っているが、^①ソーロウの講演が他の人びとのものよりも当時の聴衆により強く訴え、さらに、現在までも高く評価されているのはいかなる理由によるのであろうか。もちろん、ソーロウの弁護には他の人びとの弁護に見られるのと同じ要素が多分に含まれている。たとえば、つぎのようなものである。

一、エマスンと同様に、ソーロウもブラウンという人物にひかれて、かれを聖者に祭りあげている。しかし、エマスンの場合にはかれがブラウンにひかれて奴隸解放運動に一層関心を深めたのであるが、ソーロウの場合には、後述するが、あくまでも一個の人間としてのブラウンにひかれ、人間問題により深い関心をもったのである。

二、チーヴァーの考えたようにソーロウもブラウンを神によって派遣されたピューリタンの英雄だと考えていた。当時の一部の人は、ブラウン自身が自分を神の命令によって行動している者だと考えていた点をとりあげて、かれを狂人だと考えた。この考えかたにたいして、ソーロウは「一人の人間が、なにかある仕事を神に命じられて行なうということはあり得ないことのようにかれらは語っている。……さながら、奴隸制度を廃止しようという人は大統領や政党から任命された人でなければならないかのように語っている」と答えた。しかしながら、この問題に関しては、周知のように、ブラウンの父系には狂人があったが、かれの母系にも狂人があったということからブラウン自身も狂人に近かったのではないかと想像される。^②

三、ガリスンがブラウンを偉大で崇高な人格者として画いているのと同じようにソーロウも「わたしはブラウンの生命乞いをするのではなくて、かれの人格とかれの不朽の生命のために弁護する」と述べたりしている。^③

四、フィリスと同じようにソーロウもブラウンのことを「民主党員でも共和党員でもなく、質素で信心深い人、神を畏れない支配者にはしたがわず妥協をこころよしとしないピューリタンだ」と語っている。ソーロウか

らみるとブラウンはピューリタニズムの化身とも言うべきで、不正を拒否するのに常に自分の個人的判断を信頼した人であった。この点でブラウンは「個人が正しくて政府が不正だということがありうるのではないか^⑧」というソーロウの意見を体現した人物であった。また、フィリップスは当時の新聞や政治やニュー・イングランドの一般大衆を嘲笑してニュー・イングランドの伝統を賞賛することにとめたが、ソーロウも同じように、当時のマサチューセッツの社会を激しく非難嘲笑した。

五、ソーロウは暴力を容認するパーカーに賛成して、「人は奴隷を救うために奴隷所有者と力ずくで戦う権利をもっているというのがパーカー独自の教義である。わたしはかれに同意する^⑨」と言った。

つぎに、ソーロウを含めてこれらの人びとに共通していることは、かれらが大衆に教えたいと思っている教訓をブラウンが身をもって示したからブラウンを弁護したということである。また、ソーロウはかれらと同様に「ブラウンが絞首刑になることは必要なことである。……もし長生きしても——たとえどのような生き方をしたとしても——この刑死ほどに有益なことがかれにできるかどうかということを考えながらブラウン裁判の判決をわたしは聞くだらう^⑩」と語っている。とくに、『ハーパーズ・フェリーの反響』の著者達は、ブラウンの刑死が不可避なことだということを知って、かれを神話的英雄に祭りあげた。かれらはブラウンの行為よりも、かれの思想に焦点をあわせ、かれを十字軍の旗じるしにして、ブラウン賞賛につとめているのであるが、それに正比例して、北部のピューリタンではない人びとを非難しているわけである。かれらの態度をみると、北部の人びとをかれらの言う真の信仰に引き戻す手段としてブラウンを利用したと言っても過言ではない。

さて、ハーパーズ・フェリーの襲撃は失敗したが、これが南北間の憎悪を一層つのらせたことは明らかである。それにもかかわらず、煽動的な文章を書いていても、ソーロウをはじめ、この著者達は実際問題として南北間に

戦争が起こるかも知れないというようなことを全然予想していない。前述したように、この頃になると多くの奴隷制度廃止論者は非暴力主義にたいして疑問を抱きはじめていたのであるが、かれらは安易にも、南北戦争の始まるまでは、一つの制度としての奴隷制度を非暴力によって廃止できるだろうと心の奥底では信じていたのである。もっとも、南北戦争後には、かれらのほとんどが平和主義、非暴力主義を完全に去って、現実というものに目覚めたのであったが、その当時においては、たとえば、ホイッティヤーとか、ガリスンとかは非暴力という逃げ口上をもち出してこの南北戦争問題を無視した。あるいは、ブラウンの行動の意義をもっともよく理解して、未来の風の時代を予言したパーカーでさえも、ブラウンの思想を不当に重要視して、かれの行動の社会的、政治的、軍事的方面を軽視している。すなわち、南北戦争のような大事件が起こることを想像できなかった当時のほとんどすべての人びとは、ブラウンの抱いた奴隷解放思想と道徳的、宗教的、個人的反逆思想とを高く評価はしたが、政治的現実注目することはできなかったのである。かれらは軍旗をかかげてその周囲に集まっていたが、戦闘が行なわれる前方を見ることができずに、後方をふりむいたり、天国を仰いだりしていたようなものである。かれらと同様にソローも南北間の戦争を予想することはできなかった。結局、ソローは個人主義者という枠から出ることはできなかった。たとえば、『市民の反抗』においても、『ブラウン弁護』においても政治問題に熱心だが、政治的な實際行動をとったことがほとんどないのを見てもわかるであろう。それであるから、南北戦争というような大きな集団行動を暗示することはかれにとってむずかしいことであった。この点においては、ブラウンの風流に流れるあごびげを戦争を暗示する流星だとみたメルヴィルの予感にあたっていた。^⑤

かれらの意見の間の類似点はほかにもあげられるが、ソローの弁護が高く評価されるのは他の人びとのものとは本質的に異なるところが二つあるからだと思われる。

(註)

- ① Thoreau : *op. cit.*, p. 827.
- ② *Ibid.*, p. 844.
- ③ Cf., *Encyclopedia Americana* IV, New York, 1966, p. 607.
- ④ Thoreau : *op. cit.*, p. 845.
- ⑤ *Ibid.*, p. 829.
- ⑥ *Ibid.*, p. 844.
- ⑦ *Ibid.*, p. 842.
- ⑧ *Ibid.*, p. 845.
- ⑨ Cf., Melville, Herman: *The Portent*. ついでながらメルヴィルは戦争を宇宙劇のなかの必然的なものだと考えていた。

四

一、エマスン以外の四人の講演者達がブラウンを自分自身の奴隷問題解決策の支援者として利用しているのについて、ソーロウはその講演の冒頭において、「まず、かれの伝記について」^①とことわって人物描写をながながとつづけ、ブラウンを一個の人間としてとり扱っている。エマスンもブラウンの人物にひかれてその意見を重要視したのであるが、ソーロウのようにブラウンの人物論はしていない。ソーロウはブラウンをまねにみる常識人、卒直な人、理想と主義に生きる人、行動の人、臨機応変の才能をもつ慎重な人、超絶主義者であると実例をあげて説明している。たとえば「たしかに、多くの人びとは好人物だが、生来、または、習慣的に機能がにぶく、かれらよりも高い動機によって行動する人間を理解することができない。そのためにそういう人を

かれらは狂人だときめつける。かれらがかれらであるにとどまるかぎり、そのような人と同じようには決して行動できないということを知っているからである」とソローは述べている。あるいは、「ブラウンは人為的法則を不正なものとして認めなかった。……自分は一個の人間であって、いかなる政府にも匹敵するものだという認識のもとに、ブラウンのごとく不屈に人間性の尊厳のために立ちあがったアメリカ人はかつてなかった。その意味でかれはわれわれすべてのなかで、もっともアメリカ的なアメリカ人であった」とソローは主張した。さらに、ブラウンは大義名分のために生命をすてて真実に生きぬいたのだと考えて、「これまでアメリカでは人間は死んだことがないように思われる。なぜなら、死ぬためには、まず生きぬいてこなければならぬからである」とソローは述べた。それであるから、かれらによると、ブラウンはその死によって、いかに生きるかという生き方を教えてくれたのである。ソローは「ブラウンのことを考えてみたまえ——あの稀にみるすぐれた素質を——こういう人間をつくりだすためには何代もの歳月がかかり、また、理解するためにも何代もの歳月がかかるものだから偽りの英雄ではなく、いかなる党派の代表者でもない。……こういう人間を作りだすためには、もっとも高価な材料、もっとも立派な金剛石が必要である。かれは奴隷の救い主になるように神から地上に派遣されたのだ。それにもかかわらず、人びとはかれを待遇するのに、綱の端にぶらさげることしかできないとは何ということだ」と憤慨した。このように、ブラウンという人物の高潔さと不正にたいするはげしい反抗心を強調して弁護するソローにとって、ブラウンは市民の反抗の代表的人物であったと言える。それであるから、抗議を實踐したブラウンがソローにとって何を意味したかを知るためには、かれの『市民の反抗』と、必要に応じては（と）いうのは、これはいかにソローが政治に関して無知であるかを示したにすぎないものだから、『マサチューセッツ州における奴隷制度』(Slavery in Massachusetts, 1854)を参照しながら、かれの『ブラウン弁護』を読

まなければならぬと思う。ソーロウは『市民の反抗』のなかで、「すべての人は革命の権利を認めている。すなわち、政府の圧政、無力がはなはだしくて、それに耐えられないときには、政府にたいする忠誠を拒否して、それに反抗する権利である」^⑧と述べて、正義のためには個人は国家に反対して立ちあがることが必要だと論じている。ソーロウがブラウンを賞賛している第一の理由はブラウンが実力を行使して悪徳と戦ったことである。そして、ソーロウはとくにハーパーズ・フェリーの攻撃を賞賛し、同時に、政府と自分を守るのに汲々としている市民を非難している。『市民の反抗』のなかで「奴隷制度廃止論者と自称する人びとは、ただちに、マサチューセッツ州政府のために働くことも、財政的援助を与えることも、断固としてやめるべきである。一票の差で多数党になって、正義をひろめることができるときがくるまで待つべきではない。神を味方にすれば、多数党になるための一票を待たなくても十分である。しかも、隣人よりもより正しいならば、一人でも、すでに一票の差による多数党を構成しているのである」^⑨と主張しているから、『ブラウン弁護』は『市民の反抗』の続篇だと言っても差し支えがない。

ブラウンの人物と殉教精神とは奴隷制度に反対する急進主義者達の集合地点になったのであるが、ソーロウの『ブラウン弁護』は他の人びとの弁護と比較されると、かれらのものほどには奴隷問題に直接の關係をもっていないというのが注目すべき点である。これは一個の人間とその抱いた大義名分のための弁護というよりはむしろ、国家にたいする個人と、その個人の権利の弁護だと言えるからである。ソーロウは南部の奴隷所有者についても、その実情を知らず、ブラウンその人の実体についてもほとんど知らない^⑩。それであるから、かれの『ブラウン弁護』は決して南部攻撃でもなく、ブラウン個人の弁護でもない。かれは人道的に奴隷制度に反対しただけで、たとえば『ブラウン弁護』の終りに近い部分でソーロウは「わたしはブラウンの主義主張を弁護するためにここに

立っている。わたしはかれの生命乞いのために弁護するのではなくて、かれの人格のために、不滅の生命のために弁護するのである。したがって、これは完全に諸君自身の主義主張の問題であって、すこしもブラウン自身の主義主張の問題ではない」と言っているように、この講演におけるかれの攻撃は国家の道徳的暴虐に向けられていると見るべきである。すなわち、ブラウンは南部地方と北部地方で何千という奴隷を解放したとソーロウが言うときには、この奴隷という言葉の意味は奴隷根性の持主ということである。

二、ソーロウは一方においては他のブラウン弁護者達と同じように、ブラウンとそのピューリタンの背景との関係を述べているが、他方においては、ブラウンの開拓線とのつながりに注目している。ソーロウの言葉を二、三引用してみると、「ブラウンは西部という立派な大学で」学び、かれは「経験によって草原における軍隊の兵站補給法を知った」ということである。また、ソーロウはかれの農夫然とした態度について述べている。チーヴァー、ガリソン、フィリップス、パーカーはブラウンの西部性を無視して、かれがキリスト教の聖者であることを強調しながら、ニュー・イングランドのピューリタニズムに焦点をあわせている。エマスンでさえもブラウンの西部性についてはほとんど注目していない。極めて概括的な言い方ではあるが、ピューリタンという言葉は抑制、社会的団結、謹厳というようなものを予想させ、開拓者という言葉は放縦、社会的分離、強固な意志というようなものを想像させると言われる。⑤。そして、十九世紀ニュー・イングランドのピューリタンというときに、今日では、一般に、宗教的な面を過度に重視しながらこの言葉を用いているように思われるが、かれらが同時にもっていたもう一つの性格、すなわち、いわゆるヤンキーという言葉で表現される性格がこれには含まれているといふことを見落してはならない。

多くのブラウン弁護者達は空想的であり、反動的である。その理由は急進主義者の特色と過去の黄金時代への

センチメンタルな憧憬とを雑然と持っているからである。この反動的な面に焦点をあわせてみると、ソーロウとは違って、かれらがキャンザスのブラウンという西部性を無視していることがはっきりするであろう。ソーロウはこの講演でブラウンのピューリタンの面と西部開拓者的な面とを統合しようとして、かなり成功している。たとえば、ソーロウによると、「かれは氏も育ちもニュー・イングランドの農夫で、かれら農夫がそうであるように大へんな常識人で、思慮深く、実務家であった」^④のであり、いかにもニュー・イングランド人らしく多芸多才で、「ブラウンは生活の一部として土地測量師であった。そして、一時は羊毛業にたずさわり、この仕事でヨーロッパへ行ったこともある。そして、どこにいても自分の周囲に注意をはらって、多くの独創的な観察をしている」^⑤ということである。さらに、ブラウンのスパルタ式習慣や卒直な話し方、神にたいする畏敬の念や厳格な道德的態度、非妥協的な傾向などをソーロウは指摘している。^⑥これらは神秘的なピューリタンとナツティ・バンボー(Natty-Bumpoo)のような開拓線の英雄とを結びつける性格である。大ざっぱに言って、常識的であること、無邪気であること、多方面にわたる技術をもっていること、卒直な話し方などは初期のニュー・イングランド人に見られると同時に西部開拓者にも見られるものである。さらに、ソーロウがブラウンの行動を描写するときには、そこに西部開拓地の英雄達に見られる伝統的な性格がよく画き出されている。たとえば、無頼漢達のなかにいて自分の道を一直線に進んでゆくブラウンは、奇知縦横、大胆不敵、卒直寛大な英雄である。^⑦法網をくぐり、インディアンへの襲撃を避けて進む西部開拓地の英雄のように、ブラウンは沼地にかくれ、「インディアンや少数の白人によってのみ助けられ、敵からのがれている」^⑧のであり、「たいていの場合に敵はかれを追って、そのかくれ場所へ入っては行きたがらなかった」^⑨そうである。そして、ブラウンは荒野の生活法において賢明であり、追跡者を避けるためにインディアンのもつ技術を使っている。ついでながら、注意深く続くと、ソーロウの筆には西部

ユーモアの底流さえもわかかわれる。しかし、西部という問題をとりあげてみると、ソーロウは西部開拓地の英雄という観念については確固とした解釈をもっていない。そのために、莫然とした開拓者のイメージをブラウンにあてはめているにすぎない。本稿ではソーロウがブラウンのなかに西部開拓者のイメージを認めたということに注目すべきだということを指摘するにとどめる。また、ブラウンはソーロウによると、「何事も大げさに誇張しては言わなかった人」^③であり、「激情を外に現わさなかった人」^④で、「気まぐれや、一時的な衝動にかられることもなかった人」^⑤である。さらに、「自分の成功を馬鹿らしくも『運命』とか魔術に帰するということもなく」、また、「熱狂的でも、無分別でも、多弁でもなかった」ということである。要するに、ソーロウによると、ブラウンは「決して茶化された偽の英雄ではなく」^⑥て、キリスト教の殉教者であり、厳格なピューリタンであり、そのうえに西部自然人のもつ長所を備えた人物であったということになる。ブラウンは「自由のためでないならば、戦闘には関係しないと決心していた」^⑦そうであり、「ほらふきとか暴れ者とかになる暇はなかった」というのがソーロウの説である。

(注)

- ① Thoreau : *op. cit.*, p. 827.
- ② *Ibid.*, p. 834.
- ③ *Ibid.*, p. 837.
- ④ *Ibid.*, p. 843.
- ⑤ *Ibid.*, p. 844.
- ⑥ *Civil Disobedience in The Works of Thoreau*, p. 792.

- ㉞ *Ibid.*, p. 797.
- ㉟ Thoreau : *op. cit.*, p. 827.
- ㊱ *Ibid.*, p. 845.
- ㊲ *Ibid.*, p. 829.
- ㊳ *Ibid.*, p. 828.
- ㊴ *Ibid.*, p. 829.
- ㊵ Cf., Smith, Henry N. : *Virgin Land*, New York, 1957.
- ㊶ Thoreau : *op. cit.*, p. 828.
- ㊷ *Ibid.*
- ㊸ Cf., *Ibid.*, pp. 829—30.
- ㊹ Cf., *Ibid.*, pp. 830—31.
- ㊺ *Ibid.*, p. 831.
- ㊻ *Ibid.*, p. 829.
- ㊼ *Ibid.*, p. 830.
- ㊽ *Ibid.*
- ㊾ *Ibid.*
- ㊿ *Ibid.*, p. 831
- ㉀ *Ibid.*, p. 839.
- ㉁ *Ibid.*, p. 844.
- ㉂ *Ibid.*, p. 828.
- ㉃ *Ibid.*, p. 829.

五

このように『ブラウン弁護』におけるソーロウの意見は同時代の他の弁護者達の意見と二つの点で本質的に相違していた。

一、黒人奴隷だけではなく、世間にはあらゆる種類の奴隷が存在することにソーロウは注目した。

二、ソーロウは西部というものを意識していた。

かれは『ブラウン弁護』を「わたしは画家がもはやローマに題材を求めて旅行するということをしないで、かれのいる場所の風景を画くようなときを予想している。詩人がその場所を歌うときを、歴史家がその場所を記録するときを予想している。そして、ピルグリム・ファーザーズの上陸と独立宣言とならんで、それは未来の国立美術館の飾りになるであろう。そのときには、少なくとも現在の形態の奴隷制度はもはやアメリカには存在しないであろう^①」という予言をもって結んでいる。ソーロウ以外の弁護者達は、ローマへ題材を求めて旅行する画家のように、かれらの表現形式を求めて、ニュー・イングランドのピューリタン時代に目を向けた。そして、ブラウンのイメージを十九世紀中頃の北アメリカ大陸を闊歩する聖書のなかの戦士、殉教者、または、メイフラワー号のピューリタンとして画いたのである。このように形式化された考え方をする人びとにたいして、ソーロウはブラウンのなかに新らしいアメリカ人を発見したと言える。さらに、ブラウンは政治的革命を計画したのであって、個人の心の革命を行なおうとしたのではないが、ソーロウの常に主張している三原則をかれの行動は満たしていたからソーロウはブラウンを弁護したのである。

一、人びとを昏睡状態から覚醒させること。

二、無能な政府にたいして反抗すること。

三、行動において個人的な典型を示すこと。

ここで、ソーロウが『市民の反抗』のなかで、一人の善人は国民全部を改革できると主張したことと、ソーロウが「無気力、恐怖、迷信、頑固な信仰、宗教的圧迫、あらゆる種類の奴隷制度」^②や、「政治的集会での無意味な駄弁と職業演説家の講演」^③などに失望したことを思い出していただきたい。そうすれば、ブラウンがソーロウの理想像にかなりあてはまっていたことがわかるであろう。さらにまた、ウォルデンのヘンリー・ソーロウというイメージとオサウオタミーのジョン・ブラウンというイメージとの間にも類似性を認めることができるであろう。それであるから自然を相手にする楽しみを一時的に捨ててさえもソーロウはブラウン弁護に熱中したと考えることもできる。これはまた、ソーロウがエマスンほど楽道家ではなかったということ、かれがエマスンよりも首尾一貫した考え方をしていたということを物語っているとも言えよう。さらに、大胆な類推を押し進めることが許されるとすれば、ブラウンはソーロウよりも一層エイハブに近いであろう。悪の化身である奴隷制度はモウビー・ディックに譬えられ、ブラウンもエイハブとともに孤独であり、同じように首に綱をつけて死んだということも比較してよいかも知れない。しかし、これらのことはとにかくとして、ソーロウは他の弁護者達より、時間的にも、空間的にも、幅広く前方を見つめながら語ったために、かれの『ブラウン弁護』がもっとも有名なになったというのがわたしの結論である。^④

(注)

① Thoreau : *op. cit.*, p. 846.

② *Ibid.*, p. 834.

③ *Ibid.*, p. 835.

- ④ ついでながらソーロウの『ブラウン弁護』はその二晩あとでボストンにあるパーカーの教会でダグラス(Frederick Douglass)の講演が予定変更になった代りとしてくりかえされ、十一月三十日にはソーロウの友人ブレイク (Harrison Gray Otis Blake) 主宰のもとにウースター (Worcester) でくりかえし講演された。そして、また、ブラウン処刑の日である十二月二日にはブラウンのためにコンコードでソーロウによって重ねて講演され、ノース・エルバでのブラウン追悼式会場でもくりかえされた(このときは代読であった)。そして、これはレッドパスの『ハーパーズ・フェリーの反響』(一八六〇)のなかではじめて印刷された。

—一九六八・一〇・二七一—

付記——本稿は一九六八年五月二十四日に東京アメリカ文化センターにおいて開催された日本ホイットマン協会とヘンリー・ソーロウ協会の第二回合同講演会における講演に加筆したものである。